りりりのり

ひとり、はじまり、

ひとり、はじまり、りりりのり

福島県 葛尾村

1

創刊号

創刊号 1号 — 福島県葛尾村

葛尾村郷土文化保存伝習館 にて

riririnori

福島県葛尾村（かつらおむら）

Fukushima Prefecture
Katsurao Village

福島県葛尾村は、
いろんな「**り**」のこと、想う村。

ひと**り**、ふた**り**、ふりかえ**り**、
おかえ**り**、はじま**り**、その先へ、
本当の村づく**り**と、暮らしぶ**り**。

ひと**り**、ひと**り**が、はじまる村、
福島県葛尾村です、**りりりのり**。

村の日記のような物語

福島県の東側（浜通り）沿いに位置する、ここ福島県「葛尾村（かつらお）」。阿武隈（あぶくま）山系に属し、双葉（ふたば）郡の北西部にある葛尾村は、現在人口が１３００人ほど（４９０世帯ほど）の、それはそれは小さな小さな村（２０２２年10月31日現在）。ここは、福島県内の中でも、２０１１年３月11日の東日本大震災（福島第一原子力発電所の事故）で多大な被害を受けた地域の一つであり、その後10年以上の年月をかけて、少しずつ少しずつ、村再建の新たな一歩を丁寧に歩んできた村です。

２０１１年３月14日午後９時15分、全村避難の決断を余儀なくされ、村に誰一人いなくなってしまったあの日から、５年後の２０１６年６月12日に避難指示が解除（帰還困難区域以外の区域についてのみ）。そこから、ひとり、ふたりと村民が帰村をはじめ、そこには また、新たな「おかえり」と「はじまり」の音が聞こえはじめました。

その村の動きは、決して早いスピード感とは言えないけれど、確実にひとり、ひとりが大事にされ、ひとり、ひとりがゆっくりとはじまっていく、そんな村の息遣いを感じるものでした。

今回、そんな葛尾村のひとり　ひとりが〝りりりのり〟と口ずさむかのように、明るく軽やかに、今の村のことを考え、味わい深めていく〝日記のような〟そんな物語を書き残していきたいと思います。

葛尾村のことを何も知らない「りりり編集部」が、長年この土地に暮らす村民の方々はじめ、この村の未来を考えたいと村外や県外から集まる方々とともに手を取り合い、ゆっくりゆっくり書き進めていく本著『りりりのり』。これから先いつの日か、この〝村の日記〟が未来の力となってくれているだろうことを想像し、ここに筆を取りたいと思います。ひとり、ひとりが、はじまる村、福島県葛尾村、『りりりのり』はじまり、はじまりです。

りりり編集部

日が昇れば起きる村、日が沈めば眠る村、葛尾村は、そんな普通の村。

葛尾村 村長
篠木弘（しのき ひろし）

りりり編集部が初めて福島県葛尾村を訪れたのが、2021年11月の秋のこと。郡山から車で1時間半、車から降り立った瞬間の葛尾村の寒かったこと……。ここは、天王山（1057メートル）を筆頭に多くの山々に囲まれた冷寒地。そんな寒さも手伝って、ちょっぴり背筋が伸び緊張気味な僕ら、りりり編集部。まずは村長である篠木弘さんにご挨拶にあがりました。

その第一印象の穏やかだったこと、穏やかだったこと。聞くところによると、この辺ではあまり〝村長〟なんて呼ばれることはなく、「ひろしあんにゃ（お兄さん）」と呼ばれているんだとか。

そんな篠木村長は開口一番「ここ葛尾村はね、コンビニも何もないけれど、日が昇ればみんな起きるし、日が沈めばみんな眠る、そんなごくごく普通の村ですから。まずもってよろしくお願いしますね」と一言。そんな自然体で温かい村長の一言を胸に、『りりりのり』の日記ははじまります。

目次

まえがき 003 葛尾村 村長 篠木弘 004

第1章『大盛りのはじまり』006
村唯一の大衆食堂 007 ― ふれあいひろば 008
佐藤英人さん 009 ― 元村長 松本允秀さん 011

第2章『吉田家という家族』016
吉田健（たけし）さん 018 ― 吉田開俊さん 020
吉田健（つよし）さん 022 ― 吉田愛梨朱さん 024 ― 吉田美紀さん 025

第3章『バス停も電気も作っちゃう村』028
手作りのバス停？ 029 ― 下枝浩徳さん 030
日本一小さな電力会社・阪本健吾さん 034
電気は当たり前・松崎幸夫さん 036

第4章『村で食べるということ』038
石井秀昭さん 039 ― Happy Birthday 044

第5章『村を支える小さな気持ち』045
あったかいおにぎり 046 ― しみちゃんに絵手紙を 047
感謝のキーホルダー・若林重和さん 048 ― 作品づくりを介して 050

第1章

大盛りのはじまり

村唯一の大衆食堂

編集部が初めて訪れた葛尾村。まずは何をするにも腹ごしらえだろうと、地元の方にどこかご飯の食べられる食堂などはないかと尋ねたところ、即答一番「石井食堂に行きましょう」と。

ということで向かった石井食堂でびっくり！　小さな村の食堂だろうから、そんなに混んではいないお店だろうと鷹を括っていた編集部だったのですが、食券の券売機に並ぶ人、人、人……の列を目の前に驚きを隠せません。聞くところによると、ここ石井食堂は村で唯一と言っていいかもしれない大衆食堂とのことで、地元の方をはじめ、村を訪れた方々がこぞってご飯を食べに来る場所なのだそう。〝村唯一の大衆食堂〟というその言葉の響きに、早速この村の今の状況を感じ始める編集部。

そして、そんな編集部に追い討ちをかけるかのように目の前にドドンッと差し出されたのが、超大盛りの名物チャーハン！「え？　これ一人で食べるの？」と疑いたくなるようなボリュームに、葛尾村訪問の初日にして出鼻を挫かれた気分に……。いやしかし、これぞ葛尾村の名物チャーハンによる〝おもてなし〟、いただきます！

ふれあいひろば

人のお腹（胃袋）とは不思議なもので、「お腹いっぱいでもう食べられない！」なんて言っていたことが嘘のように、半日も経つと「あ～お腹空いた～」などと言ってしまうもの。

石井食堂で、大盛りチャーハンの洗礼を受けたばかりの編集部も、夕方にはすっかりお腹を空かせ、「今日の夜ご飯どうしようかな～？」と、人通りのない静かな村内を歩いていました。篠木村長がおっしゃっていたとおり、この村にはコンビニらしいお店がある気配もまったくなく……。石井食堂があった付近は村の中心部のようだったので、何かお店があるかもしれないとトボトボ歩いていくと、石井食堂のお隣に「ふれあいひろば ヤマサ」という看板を見つけます。

早速店内を覗いてみると日用雑貨をはじめ、菓子パンや飲み物なども販売しており、またまた小腹の空いた編集部はとりあえず何でも良いから食べ物をお腹に入れたいと、菓子パンにコーヒーを購入し、お店の前に設置されていたベンチで、むしゃむしゃむしゃ。

今の時代、何か欲しい、何か食べたいと思ったら、すぐにコンビニやスーパーが身近にあるのが当然に思えるなかで、ここ葛尾村にはこういったお店がここにしかない……という状況に驚いた編集部は、この「ふれあいひろば ヤマサ」を長年営まれているご夫妻に、お話をうかがいたいと思いました。

朝ばべナナ!!

ふれあいひろば　ヤマサ
佐藤英人（ひでと）さん

元々この店は、私の父の代から始まった店で、もう70年くらいになるのかな。初期は商店もやってたけど、クリーニングなど衣料品を中心に商いしてたんです。けど、原発事故になって村の歴史が一新されて。まさかこんなことが今に起こるなんて考えもしなかったからな。あの時は店を辞めるかどうかってところまで考えたけども、その後村の方からも村に戻ってきて営業を続けてほしいと言われたこともあり、２０１７年に商店の方だけ再開して今に至ります。

でも元々人口が少ないところからさらに少なくなってしまったものだから、商売としては大変。若い人、子どもたちが戻ってこないんだよな。そういう我々の孫も戻ってきてねえんだよ。放射能っていうのは目に見えないもんだから、恐いっていう人には恐いんだべなぁ。子どものことが心配だから、戻りたくねえってんだから、無理矢理引っ張って連れてくるってわけにもいかねえから。つまり、子どもの帰還率が極端に低いんだわな……。

山学校という学校

50年くらい前、この村にもたくさん子どもだちがいた頃のことの話だけど、「山学校」といって、学校に行く途中で登校をやめて山で遊んでた（学んでた）みたいな話があって。スクールバスなんてなかった時代だから、つまりずっと歩きだもんな。2校時頃に遅れて学校に来る子もいたりして、学校行くのを諦めて寄り道したり、山の中で学校では学べないいろんなことを学んだものなんだ。

各地区に「山学校」のリーダーみたいな存在がいてな。「今日は山学校だぞ！」ってみんなを連れていくんだわ。弁当も作ってもらって、学校に行くよりも、山に行くんだ。山や道の途中に学ぶんだな。

よく昔、葛尾村の子どもだちは大変礼儀正しいっていう評判があったのな。行き交う人にきちんと挨拶するっていうことができた。考えてみると、今みたいに車社会ではなくて、みんな歩ってたからね。向かいから人が歩ってきて、すれ違うときに何の挨拶もせずに通り過ぎるなんてことはできねえわけだ。子どもにとってみたら、歩くっていうことは、すごく大事なことなんだわ。

写真提供：葛尾村郷土文化保存伝習館

村一番のお祭り

葛尾村の昔の話をすると、村一番のお祭りっていうのに「村民体育祭」っていうのがあったんですよ。オリンピックの日に合わせてはじまった、全村上げての部落（行政区）対抗運動会、あれは大イベントだった。隣の部落には負けたくないっていうのがあって、「おらが部落が一番だ！」みたいなのでな。

部落によって、人数が少なくてリレー競技に参加できねんだなんていうことになったときには、「んじゃあ親戚でもいいから誰でも連れてきてやったらいいべっ！」って親戚を村外から連れてきてまでして参加しようとする部落があるくらい、それくらい体育祭っていうのは盛り上がって、大事なイベントだったんだなあ。

特に綱引きは一番すごかった。綱引きだけは「絶対勝ちを譲んねえ」っていう感じでな。必ず勝つ部落ってあって、それがまさに山仕事してる人たちの多い大放地区（おおはなら）な。あそこは強かったな。組み合わせ決まった時点で負けたってなって（笑）。それぞれ地区によって得意種目ができてくんだな。リレーなんてのはどうしても落合（おちあい）地区が強かったもんだし。それぞれの地区らしさもあって面白かったもんだ。

写真提供：葛尾村郷土文化保存伝習館

酒飲みが大事

なんだかんだ言っても、体育祭の後の酒飲みがメインで（笑）。若い頃は精一杯体動かして浴びるほど酒飲んで親交を深める。体育祭は残念ながら休止となったけど酒飲みの文化は今も続いてて、飲んだら隣町の移地（うつし）区にある「スナック蛍」に行ってカラオケ（笑）。現村長の篠木さんとも行ったし。元村長も現村長も引っ張り出されるわい（笑）。元村長なんか、いっぱいやりますよ。何の歌でも知ってるわな。よくあんな歌覚える時間あったな（笑）。

元村長さんは気が優しくて力持ちのタイプでもあった。片手で懸垂（けんすい）するし、片手で腕立てもして。若い頃は村外から来た悪い奴らから村の若者を助けたっていう武勇伝なんかもあったみたいで。そういう人だったから、村長を7期（28年）も続けられたんだべな。そしてなんと言っても、あの原発事故に際しての危機管理が見事であったということで、国連のある機関から日本人初の※グリーンスター賞の表彰を受けたっていうから嬉しかったな。

葛尾村 元村長

松本允秀（まさひで）さん

ということで、ヤマサの佐藤さんのお話にいよいよ葛尾村という土地を感じ始める編集部。
そんな我々が次に向かった先は、まさに2011年の東日本大震災当時、葛尾村の村長を務めていた
松本允秀さんのご自宅でした。震災が起きた時、国から村への避難指示が正式に出たのが
震災後40日程経ってからだったことに対して、3月14日の夜９時に、自主的な判断で村民に避難指示を
出した元村長。そんな元村長の村に対する想いと、葛尾村のこれからについてお話をうかがいました。

※グリーンスター賞：国連人道問題調整事務所（OCHA）と国連環境計画（UNEP）及びグリーンクロスインターナショナル（GCI）が平成21年に創設し、自然災害、大事故、紛争などによる環境危機を阻止することや危機への準備或いは対応に優れた活動をされた方々に贈られる賞。

参考：https://www.katsurao.org/uploaded/attachment/1168.pdf（葛尾村東日本大震災記録誌　本編５記録編第４章　3ページ目 P48）
葛尾村東日本大震災記録誌　※全編はこちらから：https://www.katsurao.org/soshiki/1/kiroku.html